



八王子盲学校だより



令和6年10月発行 第6号
東京都立八王子盲学校長 田島 由紀子

読書の秋にしてみませんか？

副校長 能瀬 圭介

先日、「読書離れ」が急速に進んでいるという記事を読みました。文化庁が発表した「国語に関する世論調査」によると、1カ月に読む本の冊数は電子書籍も含めて、「読まない」という回答が過去最多の63%に上ったとの記事でした。そして読書量が減った理由として「情報機器の利用に時間がとられるから」という回答が大多数を占めている結果が挙げられていました。情報機器とはズバリ、スマートフォンです。

通勤途中、前に座っている乗客を見るとほぼ全員の方がスマートフォンを眺めている光景は、もはや珍しいものではありません。そんな私自身も電車に乗ると何の用もないのに無意識にまずスマホを取り出してしまう。

「本を読まなくてもSNSの投稿やインターネットの記事で情報を掴んでいる」と思いがちですが、そうした文は短文で瞬間的な刺激が多いように感じます。ここは少し自分の生活を振り返って本を読むことをしてみたいはいかがでしょうか。

読書は新しい知識を得るだけでなく、登場人物に感情移入したり、物事を深く考えて内省したりして想像力や創造力を高め、充実感を満たしてくれます。また、読書は作文力、文章表現力を高めてくれます。スマートフォンは確かに便利ですが、それ以外の時間を失くしてしまうのはよくありません。スマホの使い方も今一度、見直す必要性を感じます。

本校の新しい図書室にもたくさんの本が並んでいます。担当の宮村先生に伺ったところ、校舎移転に伴い、ジャンル別に書籍を並び替えたり、幼・小学部の子供たちが使用しやすいように図書室の入口に幼小エリアを設置したりしたようです。

少し暑さが和らいできました。ここはひとつ腰を据えて本と向き合い、じっくり考え、冷静に判断する、そうした時間を作ってみませんか？



<旧校舎解体にあたって>

現在、旧校庭に建設いたしました仮設校舎にて教育活動を行っております。これまでの旧校舎は今後解体工事が行われます。騒音等御不便をおかけしますが、何とぞよろしく願いいたします。

特集 全国盲学校フロアバレーボール TOKYO 大会

今年度の八王子盲学校の上半期4大イベントの最後は、全国盲学校フロアバレーボールTOKYO大会の開催でした。昨年度、静岡大会を視察し、雰囲気や規模等を確認し、それを都立盲学校4校で事務局となり、その中心校として本校が運営しました。

全国大会への参加と充実した試合を通じて生徒の成長を期待し、学校全体で盛り上げ、部活動へのサポート体制の強化、同窓会への協賛の呼びかけ等を行い、選手の皆さんには安心して練習を積んで大会へと臨んでいただきました。当日、業務の都合により職員室で仕事の方もライブビューイングで映像を映して、試合を応援し、「離れた地においても八盲は一つ」と言わんばかりの一体感となっていました。

結果としては、上位に入ることはありませんでしたが、本大会を通じて、八盲一同一丸となった力は大きな事を成し遂げることができると再確認し、生徒も悔しさとともに達成感を得た表情で2学期を迎えていました。

フロアバレーボール全国大会報告

主任教諭 川嶋 拓

「全国大会出場」が1年後に迫る中、練習に選手が揃わず、技術の向上や体力の増進をはかることが難しい時期が続きました。そのような時期に重視したことは、選手一人一人が「できた！」と感ずること。「できる」プレーの積み重ねで、試合形式でやれることが増えていきました。練習試合や関東大会、社会人との練習会などを通して、少しずつチームとして目指す形となってきていましたが、なかなか結果が出ないまま全国大会当日を迎えました。

初戦は「堅守のチーム」との評判が高かった鹿児島盲学校。メインアリーナの雰囲気に緊張し、相手の粘りに自分たちの良いところを出せず2セットをとられて敗戦(8-15、7-15)。交流戦に回ることになりました。

初戦を終えて、少し緊張が解けたチームは気持ちを新たに、長野・松本盲学校合同チームとの試合に臨みました。試合開始からチーム全体が集中して、相手のアタックをしっかりブロックし、抜けてきたボールはナイスレシーブでつないで粘り強く相手コートに返し続けることができました。粘って得られたチャンスボールでスパイクヒットが何本も決まり、チームは初勝利!(25-18)をつかみました。一度自信を付けたチームは、続いて北海道札幌視覚支援学校にも粘り勝ち(27-13)し、交流戦決勝に進むことができました。メインアリーナでの鹿児島盲学校との再戦は、前日とはチームの雰囲気は全く変わって、指示する声や掛け声は大きくなり、うまくいかないときでも諦めずに試合終了まで戦い続けることができました。残念ながら勝利することは叶いませんでしたが、試合後、大会を通して、選手一人一人が「できた!」という思いと、頑張った先には楽しいことがあるという経験、そして敵わなかった悔しさを胸に、毎日の生活の中で、次のチャレンジに向けてこの経験を活かしてくれるはずです。

